

新譜「ゆらゆら春」他をレッスン 1月6日

□ 1月6日（金）は今年幕開けのレッスン、奥村さんの体操、檀先生のヴォイストレーニングに始まり、本並先生の指揮、森さんのピアノで、新譜「ゆらゆら春」と「天の火」それに、1月15日の「大阪自治労連うたごえ祭典」の公演曲を全曲；「私の好きなこの街」、「林道人夫」、「死んだ男の残したものは」、「ねがい」、「百万本のバラ」、「歓びのナーダム」、「フィンランディア」をレッスンしました。参加者は去年暮れから参加の吉本さんと新年から新入参加の三谷さん、青木さんに、休団から復帰の山本鈞郎さんを加え、全35名でした。

□ 静さんの体調が優れないため（ご回復をお祈りします）、1月中は森先生にピアノを弾いていただきます。

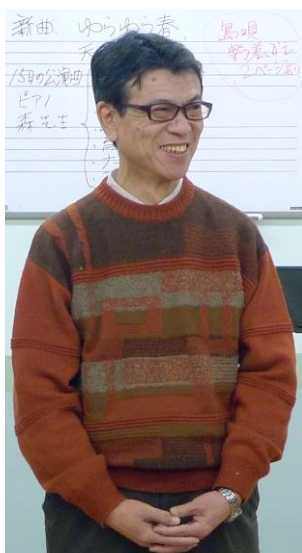
ようこそ昴へ！大歓迎！

おかえりなさい！

青木さん、吉本さん、三谷さん

鈞（きんぱち）さん

□ 去年の最終レッスンに吉本恵一さん、新年最初のレッスンに、青木隆さんと三谷卓さんが新入団され、また、休団中の山本鈞郎さんが復帰されました。新年早々、今年の団員倍増へむけて、うれしい出だしとなりました。ようこそ！大歓迎です。ともに、楽しく、力強く歌いましょう。



□ 写真は左から、吉本さん、青木さん、三谷さん、山本（鈞）さん。吉本さんは先号で載せたように、「ぞうれっしゃ」のおつきあいで、佃さんの紹介。青木さんは「京阪医療生協」のおつきあいで石橋さんの紹介、関西合唱団の83期研究生でした。三谷さんは合唱歴はウン十年、「昴」が去年ゲスト出演した「都島九条の会」がきっかけで、それぞれ入団されました。吉本さん、青木さんは「昴」の平均年齢をぐっと若返らせてくれます。三谷さんは年齢的には貢献できませんが、登山とマラソンは健在で、体力的には充分若返りに貢献していただけます。復帰されたきんぱちさんも髪の毛といい、肌の色つやといい、昴の平均点のずっと上。

「安里屋ユンタ」、「芭蕉布」、「島唄」について

「安里屋ユンタ（結歌）・・・労働歌」

詩の国・歌の国と言われる八重山の中でも、竹富島はまた芸能の盛んなところで、120以上の舞踊狂言に300以上の歌が伝えられている。「安里屋節」「安里屋ユンタ」といっても、安里屋クヤマのことを唄っているのは2番までで、後は23番まで（ユンタは際限なく）延々と目差主とイシケ（イシケマとも言う）のことを唄っている。役人によって“節歌”に作り替えられ、そして今では「新・安里屋ユンタ」が“21世紀に残したい沖縄民謡”に選ばれ、現実に竹富島でも、観光水牛車の御者も観光バスでも「新」の方を唄っている。

八重山で歌い継がれてきた安里屋ゆんたの歌詞は、竹富島の安里屋という農家の美しい女性クヤマと島へ赴任してきた目差主（みざすいしゅう）、いわゆる役人とのやりとりです。当時の役人は妻子をつれて赴任することが許されていなかったため、容姿器量とも優れた女性を現地妻としてめとることが習慣となっていた。しかし、クヤマを見染めた目差主に対して、彼女はつれないそぶりでもうてしまいます。目差主はその後、クヤマの鼻を明かそうと彼女よりもいい女性を求めて島を巡り、結局イシケマという女性を射止めるのですが、それらの物語を歌った歌詞は長いものだと20番ぐらいまであります。（別資料）

「芭蕉布」 作詞：吉川安一 作曲： 普久原恒勇

“サラリーマンが日本中に広めた戦後沖縄の代表曲”

昭和40年（1965）に琉球放送のラジオ歌謡として発表され、最初に歌った歌手は、ハワイ3世のクララ新川というチャーミングな女性だった。歌手のクララ新川は「芭蕉布」一曲を祖父のふるさと沖縄に残してハワイへ帰り、歯科医師と幸せな結婚をし二児の親となったが、海難事故で若くして世を去っているが、「芭蕉布」ほど、たくさんの歌手に歌われた沖縄の歌はない。クラシックの歌手や歌謡曲、民謡歌手やジャズシンガーまで、いろんなジャンルの人達が歌い、かつレコード化している。又、この歌がNHKの「名曲アルバム」にとり上げられて全国に知られるようになると、他府県に本社のある沖縄支社勤めのサラリーマンたちが、歌うには結構難しいこの歌を唄い出し、上手に歌えるようになった頃に転勤命令が来る。「芭蕉布」に付いたあだ名が“転勤族の歌”だった。

「島唄」 作詞・作曲：宮沢和史

東京・原宿の歩行者天国（通称ホコ天）からメジャーシーンに登場してきた“ザ・ブーム”が沖縄をテーマにして作ったのがこの曲である。嘉納昌吉（「花」「ハイサイおじさん」）に影響されて出来た曲であると言われているが、当初、沖縄ではこの曲に関して賛否両論あり、支持派は沖縄をテーマにした新しい感覚の歌であり、その力強い歌声が魅力であると評価し、否定派はいかにも本土の人が作り出したというメロディーと非現実的な歌詞がいやだと主張していた。しかし発売後、泡盛のCMタイアップ効果もあって、まず沖縄でヒット、続いて本土でも火が付き、最終的には“ウチナーグチバージョン”、“標準語バージョン”合わせて100万枚を売る大ヒットとなった。今や沖縄ではエイサーに取り入れられたり、カラオケで盛り上がりたり、完全に沖縄の歌として定着している。

「島唄」
（ウチナーグチバージョン）

一、でいごの花が咲き
風を呼び嵐がきた
でいごが咲き乱れ
風を呼び嵐がきた
くり返すくぬ哀（あわ）り
島渡る波ぬぐうとう
ウージの森であなたと会い
ウージの下で千代にさよなら
（くり返し）

島唄ぐわ風に乗り
鳥とともに海を渡れ
島唄ぐわ風に乗り
届けてたほれ
わんくぬ涙（なだ）ぐわ

二、でいごの花も散り
さざ波がゆれるだけ
ささやかな幸せは
うたかたぬ波の花
ウージの森で
歌った友（どうしぐわ）よ
ウージの下で八千代の別れ
（くり返し）

「林 光」

2012 年 1 月 5 日逝去

林光さんを偲びつつ写真を探す。2 本の木が並び光っている。これからも永く永く。

「屁理屈をつけて一枚選び出す」

『天の火』を仕上げる前の別れかな



巨星墮つ 林光さんの死

昨年 9 月下旬、自宅前で倒れた時に頭を打ち、入院。1 月 5 日に 80 歳でお亡くなりになりました。

昴で演奏している林光さんの作詞・作曲・編曲の曲は「ねがい」、「花のうた」、「なぜ!」、「浜辺の歌」、「ゴンドラの唄」、「箱根八里」、「欠陥」、「壁のうた」等多数あり、「天の火」を仕上げている最中でした。林光ファンは多く、まさに巨星墮つ之感で、残念至極なことでした。名曲の数々は後々まで歌い継がれていくことでしょう。ご冥福をお祈りします。

お礼状をいただきました・・・「私の好きなこの街コンサート」

三重県名張市 伊賀焼 龍口み和窯
高田和弘様 みはる様

こんにちは。私 11 / 21 に高田第一中学校でコンサートに参加させていただいた松野と申します。今年も残すところわずかとなり、お忙しくお暮らしのことと思います。私は書くことはが苦手なのですが、「昴」のコンサートで感動し暖かいハートが伝わってきました（あの晩はとても寒かったのにネ）

また帰りの際はプレゼントまで頂き家に帰って開けたら何とすてきな湯のみと優しさが伝わってくるお手紙まで・・・。お礼をしなければと思い、葉書を出すことにしました。

湯のみはご夫婦の丹精が詰まった作品ですので“宝物”として飾っておきます。（本当に感謝致しております）

私事ですが、津波で姉夫婦と甥、従姉妹、身内でも多くの人が被害を受けましたけど、命が助かっただけでも良かったなあとと思っています。

遅くなりましたけど有難うございました。（一番前の席で二人で座っていた一人です）

陸前高田市竹駒町 松野様より

お礼状・続報・・・「私の好きなこの街コンサート」

千秋様

写真集のとりまとめありがとうございました。

「東海新報」をさがしましたが持っている人がおらず、私がコピーされたのを持っていたので、それをコピーして送りました。

写真は私が写したものです。また、当塾の「パチパチニュース」も同封しましたのでどうぞご笑読下さい。写真を欲しい方がありましたらお知らせ下さい。

では、ご健勝に良いお正月をお迎え下さい。

2011年12月26日

新沼 正四郎 八重子

合唱や四重奏楽しむ

一中で二つの音楽会

陸前高田



合唱団が迫力ある歌声を披露＝高田一中体育館

大阪の合唱団の
激励コンサート
関西の合唱団らによ

る「私の好きなこの街
コンサート」が21日
夜、陸前高田市立第一
中学校体育館で開かれ

た。阪神淡路大震災の
あとたびたび歌われた
という「私の好きなこ
の街」をはじめ、古今
東西の名曲が市民に届
けられた。

兵庫県在住の音楽
家・作曲家の榎美知生
さんが中心となって立
ち上げた支援プロジェ
クト。海外公演も行っ
ている男声合唱団
「昂」がモンゴル歌曲
「歓びのナーダム」大
阪民謡「淀川三十石舟
歌」ロシア歌曲「百万
本のバラ」などを披露
した。

来場者がマイクを握
って参加するコーナ
ーも設けられ、「見上げ
て、この夜の星を」と
いった不朽の名曲・唱
歌などを全員で声を合
わせて歌った。

この日はタクミ印刷
発行の写真集「未来へ
伝えたい陸前高田」の
中に記された「おらあ
ここがいい」の詩を編
詞し、榎さんが曲をつ
も見られた。



中学生らにクラシックの名曲を届けた日本
フィルの四重奏＝同



「東海新報」コピー、
写真とも新沼様より
(前ページ)